宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811-3505 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940－62－1311㈹
定価 一年送料共 1000円

“世界が注目－宗像大社の菊まつり”

世界の花　日本の花「国際菊花フラワーショー」

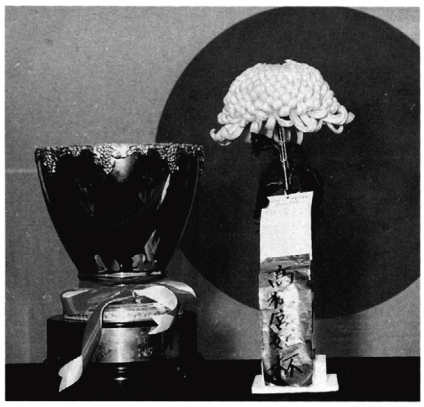
第8回　国際菊花大会
第35回　㈳全日本菊花連盟全国大会　福岡宗像大会
第29回　西日本菊花大会

菊は奈良朝の御世に中国より渡来したと言われ、春の桜と並んで秋の草花の代表花として珍重され共に日本を代表する花として親しまれて来ました。近年、その菊を栽培する愛好者は、全国で数十万人にも達し、社会情操教育、生涯学習の一環として益々増加する傾向にあります。

この度、第35回㈳全日本菊花連盟全国大会を宗像市郡に誘致し、（福岡宗像大会）として、平成十一年十一月十日より宗像ユリックスにおいて開催する運びとなりました。

この全国大会は、毎年全国各都市を会場として持ち回り開催するものであり菊花の普及向上を図ると共に、花と緑を育む心の優しさとそれを通じて社会環境の美化に努めるものであります。同時にこの道に志を同じくするもの、自己の栽培した菊花を北は北海道から南は沖縄まで、一同に集い芸術菊花を展示する光景はまさに極致のものと言えます。

従来から福岡県では菊栽培が盛んで、その振興により農業生産の拡大と菊を活用した観光事業と社会情操教育並びに花と緑、文化の向上に寄与することを目的として毎秋宗像郡・宗像大社の境内において西日本菊花大会を開催しております。



10/29㈮～11/20㈯
第29回 西日本菊花大会
九州・山口地区の代表的菊花製作者が一堂に会し、会場の宗像大社境内全体に約3,000鉢の作品が出品され、西日本地区最高の地位を確保して久しく、別名“菊作り九州ナンバーワン決戦大会”と言われています。会場では、植木・菊苗・菊鉢植の販売市も開催します。
会場：宗像大社境内　宗像郡玄海町田島2331 TEL0940-62-1311
駐車料無料

11/12㈮～11/14㈰
世界の菊・日本の菊
「国際菊花フラワーショー」
全国大会出品花、国際菊花会議参加国協賛花、福岡県農業試験場、富山県植野町園芸植物園、全国農業協同組合連合会、広島県精興園協賛菊花、フラワーアレンジメント、生花、および地元宗像大社菊花会協賛菊花の大菊花展を一般公開致します。
最終日、11月14日午後3時から出品菊花の販売を致します。
会場：宗像ユリックス　宗像市久原400 TEL0940-37-1311
入場料：一般 当日500円（前売300円）、小中高生無料
※入場券は、宗像大社、宗像ユリックス、アクシス玄海他で販売しています。
第35回　社団法人全日本菊花連盟全国大会
第8回　国際菊花会議　協賛
第29回　西日本菊花大会

第35回社団法人全日本菊花連盟全国大会福岡宗像大会、第8回国際菊花会議も開催されます。
社団法人全日本菊花連盟全国大会は毎年各県持ち回りで開催されており、九州地区での開催は20年ぶり3回目となります。
会期：平成11年11月10日（水）～11日（木）
国際菊花会議は3年に1度世界各国で開催され、日本での開催は2度目で東京以外では初めてです。
会期：平成11年11月9日（火）～11日（木）
お問い合せ先
福岡宗像大会実行委員会　TEL 0940-62-1311㈹　FAX 0940-62-1315

神具・装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店 福岡市博多区東公園一－三二 〒812-0045 電話 福岡（九二）六五一－九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入 〒600-8231 電話 京都（七五）三四一－三三四一㈹～四番 三四三－三三四一番

木組の家
匠の技
総合建設業 株式会社 弘江組
事務所 〒811-3406 福岡県宗像市大字稲元一〇一二五
電話（〇九四〇）三一－二五六七

又、この西日本菊花大会を主催する宗像大社菊花会が本年発足三十周年の記念すべき年に当たり、日本一の菊花が決定する全国大会をその模範的イベント、記念イベントとして是非成功させたいと念願しております。

福岡での開催は昭和五十四年宗像大社境内で開催してより十九年ぶりの開催となり又、今回は全国大会に合わせて第8回国際菊花会議も開催されます。菊花は日本だけの花と思われがちですが世界中に愛好家があり3年に一度各国持ち回りで開催され日本での開催は十二年ぶり2度目で東京以外では初めての開催となります。

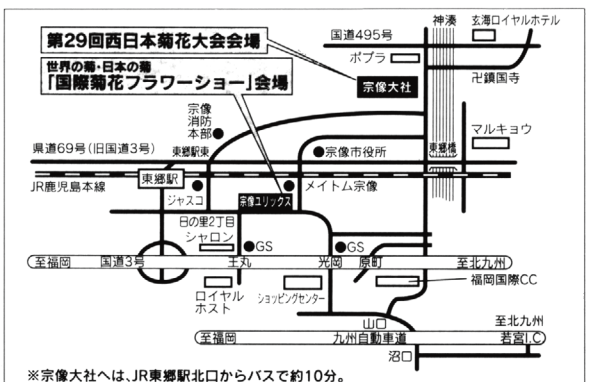
今回の大会の特長は、今までの全国大会では一般公開は行われていませんでしたが、この福岡宗像大会では日本一の菊花が集う又とないこの機会なので、是非とも多くの皆様に鑑賞して頂きたいと考え十一月十二日（金）～十四日（日）の三日間、宗像ユリックスにおいて一般公開を致します。期間中は日本の菊だけでなく世界各国の菊も展示し日本菊との違いも見て楽しんでいただきたいと考えております。

入場には整理券が必要です。前売り券大人一人三百円、当日券五百円、小中高生は無料です。前売り券は宗像大社、宗像ユリックス、アクシス玄海他で発売されています。

第35回㈳全日本菊花連盟全国大会福岡宗像大会
第8回国際菊花会議日程表

11月9日（火）		
9:00～17:00	第8回国際菊花会議	宗像大社
18:00～20:00	国際菊花会議出席者歓迎レセプション	玄海ロイヤルホテル
11月10日（水）		
6:00～8:30	菊花全国大会出品受付	宗像ユリックス
8:45～9:15	審査員会議	〃
9:30～11:30	出品花審査	〃
12:50	審査発表（日本一高松宮妃殿下杯決定）	〃
13:00	テープカット	〃
13:10～13:25	来賓・役員大会会場視察	〃
13:30～15:00	表彰式	〃
15:00～17:00	全国大会出品者会場公開	〃
18:30～20:00	全国大会歓迎パーティー	玄海ロイヤルホテル
10:00～17:00	物産市場開催	宗像ユリックス
11月11日（木）		
9:00～15:00	会場レイアウト変更	宗像ユリックス
9:00～17:00	一般公開	〃
10:00～17:00	物産市場開催	〃
11月12日（金）～14日（日）		
9:00～17:00	国際菊花フラワーショー開催	宗像ユリックス
10:00～17:00	物産市場開催	〃
14日		
15:00～	全国大会出品花即売会	〃

〈会場案内図〉



※宗像大社へは、JR東郷駅北口からバスで約10分。
宗像ユリックスへは、JR東郷駅日の里口からバスで約10分。

余滴

暦の上では秋闌日、文化行事も盛んに催される一方、各サークル、グループが各地の考古学遺跡巡りや博物館見学会等が多く計画されている。

博物館とは、昭和二六年（一九五一）に博物館法が制定され、博物館・美術館・民族館・科学館・水族館・動物園・植物園等多種多用の文化施設を総称するとされている。福岡県には公立・私立館園を合わせて、今一一〇の博物館が公開されている。

古代から東西文化の交流地であり、日本の玄関口福岡に九州の「国立博物館」をと言う運動が始まって、今年は丁度百年目である。

明治三二年（一八九九）に岡倉鉄心が、九州博物館設置の必要性を説いたことから始まり、建設運動が続けられてきた。平成八年（一九九六）に文化庁が「九州国立博物館」を太宰府に決定し、百年の夢もようやく結実し、先人達の夢が現実となりつつある。

福岡は海のシルクロードを眼前にした、東西文化交流の基地である。

二千年前、中国漢の光武帝から「漢委奴国王」の金印を授かった「奴国」から、また大和王朝の「遠の朝廷」と言われてきた様に、福岡は日本の表玄関であり、常にアジアの国々との文化交流の重要拠点とされてきた。

ここに「九州国立博物館」を設置し、アジアの学術文化交流の総合研究の場として公開し、古しへだけでなく、新生アジアの文化を知る国際的な地として、早い建設が待たれている。

秋季大祭

田島放生会盛大に斎行

当大社秋季大祭の初頭彩る海上神幸「みあれ祭」が、十月一日早朝より玄界灘洋上にて勇壮に繰り広げられた。

午前八時三十分中津宮にて出御祭を告げる花火と共に祭典が斎行された。祭典には海上神幸総奉行の宗像大社海洋神事奉賛会長村田繁美氏を始め奉行の宗像地区各漁業協同組合長以下関係者、沖中両宮奉賛会長佐藤千里氏、御座船奉仕者に各界の崇敬者多数が参列。祝詞奏上、玉串拝礼の後、いよいよ沖津宮、中津宮の御神璽が出御される時を迎えた。

輦台にお移しされた両宮の御神璽は、大島小学校の鼓笛隊を先頭に、先導神職が蔽清める参道を、警蹕の声が渡御を知らせる中、中津宮より中央波止場へと神幸、二台の輦台には総奉行、奉行が従いお護りする。その後ろには参列者が続き筑前大島は祭り一色となる。

大島港の内外には大漁旗、紅白の吹き流し等で装飾した四百隻近くの漁船が集結、いずれもエンジンの音を高鳴らせ待機している。広い港内も大小の漁船で埋め尽くされ、マストが林立する様は誠に壮観である。

両宮の御神璽が御座船に奉安されると、報道各社のカメラが廻り、しきりにシャッターが切られる。波止場にはお見送りのため村中の人々が集まり、港内は海上神幸の始まりを今か今かと待つ熱気で溢れた。

一方田島の辺津宮でも、沖・中両宮の御神璽をお迎えすべく出御祭が斎行され、辺津宮御神璽は神湊へと神幸された。

定刻午前九時三十分、花火が打ち上げられ参加者、参列者に出航を報せる。先ず先導船の宝寿丸（地ノ島、健栄丸（神湊）の二隻がするすると滑るように岸壁を離れる。次いで沖津宮御神璽御座船の第八新幸丸（鐘崎・八尋正治氏奉仕）と中津宮御神璽御座船の沖津丸（大島・沖西豊幸氏奉仕）が静かに出港。「国家鎮護宗像大社」の大幟がはためき、御座船の後ろには満艦飾の供奉船が従う。濃霧立ちこめ視界の良くない生憎の状況ではあったが、海上は穏やかで船団は例年にも増して多くの参加船となった。

大島港出港後一旦船団を整えた大船団は、船首を東に向け神幸。空からは各テレビ局、新聞社のヘリコプターがこの秋到来を告げる海の一大ページェントを上空を旋回しながら取材。洋上を吹き渡る秋風は、潮の息吹に包まれて、まだ秋とはいえ汗ばむ時期には心地よい。各船とも快調な機関音を響かせ幾筋もの航跡を残し進む。

昨年の「みあれ祭」は、台風接近のため海上神幸をやむなく中止し、前日に沖・中両宮の御神璽を辺津宮にお迎えした。よって本年の「みあれ祭」は、関係者が待ち望んだ祭典で、無事の御巡幸を期待すると共に、海の男の心意気はいやが上にも高まった。

地ノ島を間近に見て船団は大きく右に旋回、船首を神湊に向ける。海は紺碧、白い船体、緑の若竹、紅白の吹き流しに大漁旗、かつての宗像水軍もかくやと想われる海上絵巻であった。

やがて神湊の海浜が近くなり、海岸線鈴なりの参観者が見えて来る。いよいよ三女神再会がもうすぐである。神湊港入港直前船団は一時停船、供奉船以下の船団は編成を解き、御座船に別れを告げ、各浦を目指して帰途につく。その後先導船、御座船が神湊港に入港、かくしてここに三女神は二年ぶりにお揃いになられた。

再会を果たされた三女神は、御旅所の頓宮に御巡幸、頓宮祭を執り行い御座船奉仕者に感謝状を贈呈して同所での祭典を終了。続いて同所より御座車にて辺津宮に神幸、正午前無事入御され、氏子・崇敬者が待ち望んだ「みあれ祭」は無事盛大に斎行された。

――◇――◇――

（敬称略）

九月十一日
沖津宮神璽迎え御座船奉仕
沖一丸（18 t）　大島魚協
船長　沖西敏明（51才）

十月一日
みあれ祭
沖津宮御神璽御座船
第八新幸丸（14 t）鐘崎魚協
船長　八尋正治（29才）

みあれ祭
中津宮御神璽御座船
沖津丸（19 t）　大島魚協
船長　沖西豊幸（63才）

陸上神幸御座車奉仕
・株式会社　新出光
・西久大運輸倉庫株式会社
・宗像地区タクシー協会
・株式会社　魚屋

十月一日
宗像郡内神職奉幣使
摩利支神社
宮司　中村　侃
随員　渋江　公譽
（宮地嶽神社）
宮地嶽神社献幣使
祢宜　阿部　信
氏子奉幣使
上西郷　松井　参伍

神前に神楽舞奉納

十月一日から三日に亘り、文字通り〝秋晴れ〟の空の下、秋季大祭が厳粛、盛大裡に斎行された。

別名「田島放生会」とも呼ばれている当大社の秋祭は、永く神郡宗像の人々に親しまれ、この大祭期間中の祭典には、毎日神前に於て雄々しく奉納される。

先ず十月一日は「主基地方風俗舞」。これは、昭和三年の昭和天皇御即位大嘗祭の折に、福岡県が主基斎田に選定された時に舞われた「主基地方風俗舞」が全国で唯一、当大社に伝承保存されており、本年も地元氏子男子、田島区青年団により奉納された。

十月二日には「翁舞」。これは今から約五百年前の明応八年、時の宗像大社宮司氏国が、鐘崎の沈鐘を引き揚げようとした際、海面に翁の面が浮び上り、鐘の代わりとして龍神より授かったものと伝えられ以来、当大社神宝とされ、この翁面をつけ、年に一度神前に於いて、福岡市・喜多流社中の奉仕により、災難消除・延命招福を祈り厳かに奉納されている。

そして十月三日には「浦安舞」。この舞は紀元二千六百年奉祝を記念して制定されたもので、元宮内省楽長多忠朝氏の作で、神楽歌は昭和天皇の御製「天地の神にぞ祈る朝凪の海のごとくに波立たぬ世を」に曲をつけたもので、世界の恒久平和を祈念されたものである。当社では、玄海中学校女生徒四名の奉仕により、太鼓・笛・琴の音に合わせ優雅に舞われた。

多数多くの参拝者の中、祭典は厳粛に斎行されるが、その中で舞われる神楽舞は、華麗に大祭に色を添え、人々を魅了していた。

南坊流献茶祭

当大社秋季大祭三日目午後一時より拝殿に於いて南坊流瀧口社中による献茶祭が奉仕された。

南坊流とは千利休の高弟であった南坊宗啓（そうけい）により開流されたと云う。南坊流は、表千家・裏千家といった家元をもたない流派で、江戸期に二派に別れている。一方が江戸南坊（京都）もう一方が筑前南坊である。黒田家が筑前を領した頃より福岡中に広がり、当大社との関係も始まったようである。しかし一時期関係が途絶えてしまい、昭和に入り復興され、今日に至っている。

本年は約二十名ほどの昇殿のもと、南坊流瀧口社中花田宗房（そうほう）氏によって、濃茶が点てられた。祭典は約一時間に亘り、本年奉職したばかりの私の足は悲鳴を上げていた。

当大社の巫女に茶道を教授して下さっている、同流派の小方百枝先生によると、お点前の丁寧さでは、南坊流が他のどの流派よりも丁寧であると伺った。

又、先生は「茶道とは相手に粗相のないように気を使い、丁寧に茶を点てるという精神修業の場である」ともおっしゃっていた。今回の献茶祭で奉仕された瀧口社中の方も、神前に於いて誠心誠意奉仕されていた。

そう考えると、この茶道の精神とは、日々神前にて滞りなく祭典が取り行われるよう奉仕している我々神職の、神道の精神にも通じるところがあると感じられた。

神道も茶道も共に〝日本人の心〟を表しているのである。

宗像護国神社秋季大祭

明治維新以降先の大戦までに、我が国の尊厳と繁栄を願いつつ、一身をなげうって祖国の国難に殉じた宗像市郡出身の英霊の御魂をお慰めすべく、宗像護国神社秋季大祭が三日、総社大祭に引き続き斎行された。

祭典は太田宮司以下神職四名、巫女二名奉仕のもと、宗像市並宗像郡遺族連合会の吉田、中村両会長を始め役員、遺族に軍恩連、傷痍軍人会、海交会等の関係者、更には県議、宗像地区市町村長、同議会議長等の行政関係者の他一般参列者も多数参列し厳粛に執り行われた。

宮司が護国神社に鎮まります、国家・国民のために尊い命を捧げ華散った二五七六柱の英霊命に、追悼と報謝の祝詞を奏上、巫女が御霊の安らかならんことを祈り浦安舞を奉納、遺族を始め参列者も在りし日の英霊命を追慕しつつ敬虔な祈りを捧げた。

今日の我が国の存在は、英霊命の聖業にほかならない。本年やっと「国旗・国歌」法案が成立し英霊の崇高なる精神に少しでも報いることが出来たが、終戦後の世情はまだまだ予断を許さないのが現状である。それだけに我々は全国の戦没者の英霊命祭祀する東京の靖国神社の国家護持実現に向け邁進すると共に、地方の護国神社護持の努力に責務を感じる。

七五三祭の御案内

毎年十一月十五日に数え年三才の男女児、五才の男児、七才の女児をつれて神社に参拝し、今日までの無事発育を感謝し、更に将来の成長を祈願するお祭りです。

昔は三才の男女は髪置、五才の男児は袴着、七才の女子は帯解きの祝いが行われていました。この我国古来の慣習を今日に伝えるのが、七五三祭りです。

当大社でも、お子様の健やかな成長と幸せをお祈りする、恒例の「七五三まつり」を、本年も左記により盛大に執り行いますので、皆様お誘い合せの上御参拝下さいます様ご案内申し上げます。

記

期　間　平成十一年十月二十四日～十一月十五日
（尚、この期間以外でも、おまつりは行っております。）

初穂料
一件（一人）三〇〇〇円
一名増すごとに、二〇〇〇円の追加となります。

授与品　御祈願お申し込みのお子様には、お守り、千歳飴、御幣などを授与いたします。

御　礼

秋季大祭に際しましては、宗像警察署・玄海町消防団を始め、各関係諸庁の御指導を仰ぎ、宗像六漁業協同組合外全国各地の皆様方には神前へのお供えを賜わると共に、氏子・崇敬者各位の御協力により、祭典を無事盛大裡に斎行することができました。

ここに紙面を以って、謹んで御礼申し上げますと共に、皆様方の益々の御繁栄を心より祈念申し上げます。

平成十一年十月吉日

宗像大社社務所

各位御一同様

〔ご案内〕十一月の各神賑行事

本大会は、菊作り九州一を決定する大会として、福岡県を始め、大分、佐賀、長崎、熊本、宮崎、鹿児島、山口県各地から、代表的菊花製作者が丹精込めて作成した菊花約三〇〇〇鉢が、一堂に会し技を競う。秋晴れの神苑に大輪懸崖、盆栽、総合花壇など見事な菊花が咲き競います。

期　日　十月二十九日～十一月二十日迄
会　場　境内全域
〈展示ハウス百余棟〉
表彰式　十一月十六日

―◇―◇―

第二十九回　西日本菊花大会

西日本地区は元より全国的に注目を集めている菊の祭典西日本菊花大会は、本年も宗像大社特設会場に於て開催される。

第二十五回　奉納吟剣詩舞大会

錦秋の菊花薫る境内に、我が国の伝統と「大和精神」を伝える吟道に永年精神されている、熊本市に本部を置く清香吟社（会長益中鵬山）社中の会員約百名が、神前に詩吟、剣舞を奉納。清明殿に於て、日頃練磨した自慢の喉で詩吟剣舞大会が行われます。

期　日　十一月三日
午前九時三十分より
会　場　宗像大社清明殿

―◇―◇―

第二十七回　秋季奉納盆栽展

宗像地区盆栽愛好家の集まりで、宗像大社奉納盆栽会（渡部徹会長）を結成し、春・秋と年二回盆栽展を開催しています。

又、昨年よりできるだけ自然に近い姿を目指し、他にあまり例の無い、露天の展示を本殿横の境内で行っています。

秋の盆栽展は、皐月や藤などの花物を中心としている春の盆栽展に対し、松柏類の木物を中心とした作品が約四十五席展示されます。

期　日　十一月十一日～十五日迄
会　場　本殿西側境内

―◇―◇―

第二十八回　献詠短歌大会

福岡県内を中心に、各地の短歌愛好者から、たくさんの詠草が寄せられ、著名な斯界指導者の先生方を選者としてお招きし、講評・指導を受けると共に、参加者相互による批評、感想を発表するユニークな大会として好評を得ています。

期　日　十一月十三日
午前十時より
会　場　宗像大社清明殿

―◇―◇―

第十九回　少林寺拳法奉納演武会

この演武会は、宗像地区の少年拳士・大学生・一般拳士百余名が参加、日頃の修練の成果を神前に奉納します。

期　日　十一月七日
午後一時より
会　場　本殿横境内
〈雨天の場合中止〉

―◇―◇―

第二十六回　宗像大社本因坊戦

宗像地区囲碁界実力ナンバーワンを決める大会で、宗像郡市内より囲碁愛好家約百名の有段者が出場、四段以上の実力者による本因坊戦と、一般参加選手による有段者の部が行われ、盤上での熱戦が繰り広げられます。

期　日　十一月十四日
受付時間　午前九時三十分から五十分迄
会　場　宗像大社清明殿

第二十二回　宗像大社刀剣展

菊と刀といえば、古来より日本の象徴であったように、日本人の心をひきつける魅力があります。

本年も神社刀を中心に、崇敬者の方々の御協力のもと、鎌倉時代から現代までの刀剣類を展示します。

期　日　十一月一日～十一月二十日迄
会　場　宗像大社
神宝館二階
拝観料　三百円

―◇―◇―

第四六〇回　宗像大社歌会詠草

大野展男選

毎月25日〆切

在自　佐々木和彦

玄海に片脚の虹立ち上がりなまあたたかき夕風の吹く

〈評〉夕虹の立つた時の気象の変化を敏感にとらえた一首。ただ虹は太陽と反対側の空中に立つ故に、初句の「玄海に」では虹と太陽の位置関係がやや茫漠とした憾みがある。

田久　井上　光

澄みわたる白露のあした川土手に火の色かかげ彼岸花咲く

〈評〉さわやかな白露（はくろ）の朝を演出したのは川土手に突として咲き出た彼岸花であり、その咲きざまを簡明印象的にとらえ表現した作者の目である。

原町　八波　五月

盆休み終れば今朝は隣り家の嫁が職場のバス待ちて居り

〈評〉さりげ無い叙述である。しかしさりげ無い中には隣家の嫁に注ぐ作者の暖かい心が感じられ作者の人柄が偲ばれる一首である。

池田　小田　イセ

農せねどたるる稲穂の色づきに心ひかれて掌に載せて見る

〈評〉短歌の主題はいつもただ一つである。一首の初句は作者の場を述べ以下本題に入り、稲穂に寄せるこころを結句の「掌に載せて見る」で見事に締めている。

八幡西　有吉　陽子

夜を徹し知覧の兵士語り継ぐ文集受取る敗戦の日に

〈評〉心ひかれる作だが、上句このままでは「知覧の兵士ら語りたる」か「知覧の兵士を語りたる」かはっきりしない。そこが惜しい。

大島　越智　治子

曇り日の続く初秋ほつほつと森の水引紅の花咲く

〈評〉植物や小動物たちはどうして季節の変化を知るのだろうかと思うことがある。不順な今年ではあったが、いち早く秋を感じ花を咲きそめた森陰の水引に目をとめた作者。ゆっくりとした筆致に秋の風景である。

福間　中村　勇

アメリカは虹は五色と言ふときく今朝鮮明な虹を見つむる

名古屋　小田　留子

美しく老いるなどとは程遠し息災ならばこれで良しとす

吉留　高山　信子

獨り住み世話にならぬと豪語せし吾に力をと泣き泣き祈る

鐘崎　安永　久子

賜ひたる歓びとして紅淡の朝顔の額部屋に見飽かず

光岡　竹浦　葛明

日暮れまでつくつく法師鳴き続く風なきしじまに嘆ぶが如く

城南ケ丘　中間日出子

さらさらと流れる川に子供等のはしゃげる声きく木漏れ日の下

武丸　中村さつき

宮崎の梅雨の大雨に新築の畳の黴るを嫁は嘆くも

名古屋　小田　喜一

終戦の玉音耳朶に残りをり手を取り泣きし友のまた逝く

自由ケ丘　細川　絹子

刈り込みし生垣越えて吹き来たる風やはらかく肌にやさしも

田野　森　つるの

小さき帆を立てて波乗り楽しめる若者を数ふ海辺の宿に

朝野　藤井　浩子

高速道長く走りてわが下りるインターチェンジの花の彩り

大島　杉田　禮子

軽々と漁船に乗り込む若きらの茶髪が夕日にまた染まりゆく

田野　森　甲子

垂れ初めし稲穂を分けて稗拭くに汗ばむ肌に風のさはやか

光岡　河村　久光

ナースがエコー検査を知らせくる十二時間も絶食しおるに

福間　池浦千鶴子

出で発つと子に返されし玄関のキーの小鈴が微かに鳴りぬ

曲　天野　玲子

片足の萎えたる母に贈る杖買い来てかなし敬老の日に

大社の奉納刀（十）

仙寿

「宗像刀」愛刀家にとっても聞きなれない言葉であるが、昭和の初期に宗像大社の南、田島村山下の地に「宗像刀鍛錬所」があった事実がある。

その昔、永禄三年十月十日、許斐城の攻防をかけた立花勢との合戦に、許斐・吉田・大和等諸將の軍勢に、刀鍛冶、稲光太郎左衛門、金剛兵衛盛高が参戦した事が元禄七年発行の「宗像記追考」に記されている。宗像大宮司家も、刀鍛冶を召抱えていた事は当然であろうが、その中に筑前の名工「金剛兵衛盛高」の名があったのは驚きである。しかしその鍛冶場が何処にあったかは今は定かではない。

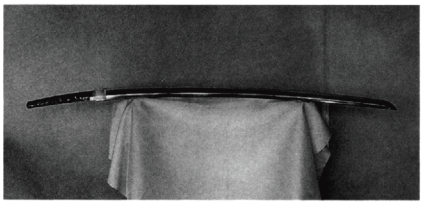
昭和八年十二月一日、遠賀郡の鉱業家、岩崎鶴亀氏を発起人とする「宗像刀鍛錬所」建設地地鎮祭が、前記場所で執行され、翌年三月十八日、鍛冶始式が岩崎氏を始め、後援会の名士多数参列のもと、刀匠桜井正次の甥、桜井正幸、川崎貞一、川崎礼蔵が、槌音高く鍛冶始めを行っている。

当時の福日新聞は大きく紙面をさいて、岩崎氏は刀剣の愛護家であり、敬神の念篤き人物と紹介し、氏が多大の浄財を投じて、宗像神社、香椎宮、筥崎宮の三官幣大社に、御神刀奉納を目的として、当時斯界に名高き刀匠桜井正次氏を招聘し、鍛刀場を建設したと報じている。

掲載の刀は昭和九年六月廿五日、宗像神社の御神前で「宗像刀奉納祭」を執行し奉納された御神刀である。

刀は刃長六八・二糎、反り一・六糎、先巾二・九糎、元巾二・九糎、鎬巾せまく、京反り、地鉄は小板目肌流れ心に良くつんでいる。刃紋は僅かにのたれ心の匂出来の直刃で、刃区から三十糎位まで刃縁に輝く沸が付き、帽子は小丸で返りが深い。

刀銘に（表）昭和九年二月吉日　金剛斉卍正次。（裏）奉納、宗像神社・岩崎鶴亀と切られている。



各大社への御神刀の奉納が滞りなく終った後、賀郡の鉱業家、岩崎鶴亀氏を発起人とする「宗像刀鍛錬所」建設地地鎮祭が、前記場所で執行され、翌年三月十八日、鍛冶始式が岩崎氏を始め、後援会の名士多数参列のもと、刀匠桜井正次の甥、桜井正幸、川崎貞一、川崎礼蔵が、槌音高く鍛冶始めを行っている。

当時の福日新聞は大きく紙面をさいて、岩崎氏は刀剣の愛護家であり、敬神の念篤き人物と紹介し、氏が多大の浄財を投じて、宗像神社、香椎宮、筥崎宮の三官幣大社に、御神刀奉納を目的として、当時斯界に名高き刀匠桜井正次氏を招聘し、鍛刀場を建設したと報じている。

掲載の刀は昭和九年六月廿五日、宗像神社の御神前で「宗像刀奉納祭」を執行し奉納された御神刀である。

刀は刃長六八・二糎、反り一・六糎、先巾二・九糎、元巾二・九糎、鎬巾せまく、京反り、地鉄は小板目肌流れ心に良くつんでいる。刃紋は僅かにのたれ心の匂出来の直刃で、刃区から三十糎位まで刃縁に輝く沸が付き、帽子は小丸で返りが深い。

刀銘に（表）昭和九年二月吉日　金剛斉卍（まじ）正次。（裏）奉納、宗像神社・岩崎鶴亀と切られている。

各大社への御神刀の奉納が滞りなく終った後、名を「日本刀鍛錬宗像道場」と改め、御神刀の金鋏を使って鍛えた太刀、軍刀、短刀を愛刀家に頒布している。

鍛錬道場は、筑前、豊前の刀工の育成をも目標に掲げており、筑前守次の末裔である「守次恒三郎行宗」も昭和十年三月、正幸師に入門して業を磨いている。

昭和十二年八月、桜井正次師の一身上の都合により後継者もない為、鍛錬道場は閉鎖の止むなきに至った。三年間で幾振の「宗像刀」が鍛錬されたか、今は知るすべも無い。

一話一話（82）　古代豪族の奥津城（6）

樂岑子

早くから宗像の地に居住し、玄界灘を占有して治めてきた、海人族ともいわれている豪族の墳墓が、海を一望のもとする津屋崎海岸の台地の上に連なっている。

この一帯が古代宗像族の奥津城である。

前方後円墳一二三基を含む二～三〇〇基にもおよぶ古墳が、神湊・牟田尻から初まり、生家・大石・須多田・在自から宮地獄大塚へと、群集して連綿と続いている。

これらの古墳に埋葬されている人々は、「日本書紀」にみられる「胸肩（胸形）君」の一族であり、ここが歴代の奥津城である。

大和王朝も律令制の時代に入り、大化五年（六四九）神郡制が制定される。「宗像郡が建置され、神郡として宗像社に寄進される（令集解）」

神郡宗像の大領は宗形（宗像）氏で、古墳時代では胸形君であった。この胸形君が宗像地方を統割している豪族であり、宗像三女神は胸形君が斎き祀る神であった。

今回から代表的な古墳の紹介をしていく。

〈上高宮古墳〉

宗像大社辺津宮南西の裏山に高宮祭場がある。そのもう一段と高い所が上高宮と呼ばれている。江戸時代に書かれた「筑前国続風土記拾遺（青柳種信編）」には宗像山と呼ばれている。

宗像沖ノ島1本文を参照。

『宗像第二宮御造営記録』および貝原益軒の『筑前国続風土記』巻十六によると、慶安三年（一六五〇）、福岡藩主黒田利之が辺津宮の鳥居、板橋二ケ所、第二宮、第三宮、上高宮を造営したとある。「上高宮に社檀を建立した際、地下に長さ八尺余、横四尺余の石筥あり、なかから円鏡十二面、矢ノ根七十二本、太刀二振が出てきた。藩に報告し、もとのごとく収めた」と書かれている。

大正十五年（一九二六）九月、発掘調査が再び行われているようである。これによると、「東西に砂岩の板石で作った箱式棺を置き、その東部に仕切りの石を置き、いわゆる弁当箱の―おかずいれ―と呼ばれる小室をつくり、上を七枚の石蓋で覆っている」とある。また出土品が、江戸期には鏡が十二面、矢ノ根七十二本とあるが、この時は「鏡一面、銅鏃六個、鉄鏃四十個出土」とある。がしかし、大部分の出土品が蒸発してしまったことになる。

大正十五年出土の遺物は、「四乳獣文鏡（径四寸）、有茎式銅鏃六個、勾玉二十個、碧玉製管玉十一個、蕨手刀子二本、刀子二本、鉄斧二個、鉄鏃約四十個、鉄剣四口以上、直刀二口、横矧板革綴短甲」などが出土したとある。

沖ノ島祭祀と同様な出土品は蕨手刀子である。沖ノ島岩上祭祀（四～五世紀）の16・17・21号から出土しており、16・17号では銅製の三角縁神獣鏡を、21号では舶載の獣文帯冠子孫獣帯鏡を伴っている。有茎銅鏃は沖ノ島から発見されていないが、九州では福岡県京都郡の石塚山古墳からの出土をみる。

宗像大社歌会
俳句作品集（四三六）

福　間　森　清

夏休み終りし子らの雨に釣る

小　笹　山下しづえ

老いてなほ色紙細工美美しかな

自由ケ丘　細川　絹子

落ち柿に蟻のむれいて黒くなり

日の里　花田いつ枝

雨止みし空大いなる法師蟬

東　郷　吉武　湧泉

寄り添ふて灯し流るる精霊舟

東　郷　中野　きみ

種蒔けば花も実もある農の幸

東　郷　吉田　衿子

石むろの小さき佛に萩の風

東　郷　吉田　杏子

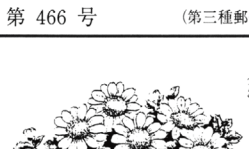
岸離る流灯に言ふ別れかな

東　郷　三浦美千代

稲田吹く風に少しの匂ひあり

東　郷　木原　房子

九十六歳三伏の夏越えましし（姑）



（続）浜の寄物 141
いしいただし

東北の旅は陸中海岸国立公園を船から観る予定だったが、生憎の小雨、ヤマセで気温が低くなっただけか、モヤが出て、観光船は出ず断念、宮古の浄土ケ浜も小雨の中を歩く。浜の石は石英粗面岩で白ぼく、天気がよいと海の藍と対照して、不思議な雰囲気があり、浄土の由来もわかるという。

万里長城

近くに県立宮古水産資料館があったので見学してきた。県の北側・久慈は海女の北限地で、海女の用具が展示されていた。

釜石で宿泊、鉄都も今はすっかりさびれ、工場内に火力発電所を建設中だった。翌日は快晴で、遠野物語の遠野市へ、遠野物語は柳田圀男がその弟子の佐々木喜善から聞いた話をまとめたものである。佐々木喜善記念館等を巡ってきた。ここも観光化していたが、日本中が村おこし、町おこしである。古いまんまでは村も町も生きてはいけない。遠野もどこにでもある観光地になっていた。

新花巻から東北新幹線で仙台へ、仙台空港から福岡空港へ。東北の旅は無事終了した。陸中海岸は残念だったが、ほぼスケジュール通りに事が運んだのは平田晴夫先生のこまかな計画であった。ただ天候だけは分からない。

雨の多い夏が終って九月もすっきりしない天候だったが、九月九日より十六日まで中華人民共和国を巡ってきた。荒金章也氏の主宰する「九州古代史の会」が中国博物館巡りをするというので参加させてもらった。見学地は上海・北京・洛陽・西安である。どこも日本人に深い縁のあるところだが、とりわけ弥生時代からの洛陽や奈良・平安時代の西安（長安）は、日本人としては行ってみたいところの一つである。

福岡空港新国際線から中国国際航空で三時五十分飛びたち、上海へ。一時間三十分。上海までは空席が目立ち、窓側に席を移り、窓から下の海を見たりしていた。上海近くで、海の色が変わっていた。泥色した海である。こちらは九世紀の話だが、円仁が日唐求法巡行記の中で、白水（泥流）を見て、陸地が近いことを感じたことがでている。円仁は千百年前の八三八年六月十三日出航、船が志賀島の沖を六月十七日に通り、六月二十三日には五島値賀島へ、六月二十八日には大陸に近づき、黄泥水、漂流物を見ている。七月一日大江口に流着、七月二日に中国大陸揚港に着いた。風待ち波待ちで日数もかかり、決死の覚悟で海を渡っている。

上海で時間待ちをして、北京港に着いたのは七時三十九分だった。遅い食事をしてホテルに着いたのは十時近くであった。

十日は北京市内を見学、天安門広場近くの中国歴史博物館を見学。博物館は時代順に展示されているが、中国古代から唐代の展示物が圧巻。展示方法は古く、陳列ケースも昔のままで、館全体が老朽化している。ただ中国の博物館は、ほとんど写真撮影を許可しているのはうれしかった。

天安門広場の周辺では十月一日の国慶節の準備で会場設営が行われていた。広場は南北八八〇メートル、東西五〇〇メートル、世界一の広場である。実に広い、国内外の観光客であふれていたが、隊列を組んだ武装警官がきて、五メートル間隔に並ぶと、大声をあげ血相を変えて、広場から観光客をアッという間に排除してしまった。数日したら広場の立入も禁止され、周辺のホテルも厳しい管理下に置かれるという案内ガイドの説明であった。私達の見学も、北京市外からはじめる予定だったが市内から見学することに変更したのである。観光コースの故宮（紫禁城）、天壇公園（天帝に五穀豊穣と国の繁栄祈願した祈念殿）を見学、広さ、大きさにただただ驚くばかりであった。

十一日は北京郊外を中心に見学、バスで八達嶺に着くと、万里の長城へ。北方民族匈奴の侵入を防ぐために築かれた長城は、紀元前五世紀周代からはじまり、秦の始皇帝代には長さと規模ではほぼ完成、その後明代頃まで延長や修復等が続けられ、全長約六七〇〇メートルという大長城は「月からも見える人類史上最大の建造物」という。

長城も国内外の観光客が押すな押すなの人ばかり、この日は土曜日で晴天。明の十三陵も人の群れであった。この日の最後は北京同仁堂薬店であった。一同魔術にかかったようにサイフの紐を開いて高価な漢方薬を買わされてしまった。私も「一ケ月分」の薬を手にしていた。この日も人に酔い、大きさに驚き、あきれた一日であった。十七時に北京空港から郷州空港に着いたのは十九時四十五分。食事をすましてホテルへ、シャワーをあびたりして、荷物の整理等で床に着いたのは十二時近くだった。

青柳種信 著
平野国臣 写
瀛津島防人日記（下巻ノ十三）

八幡大神は軍神にまして、源氏の人々をはじめとして、武士のいたく重み奉るにより、絶て此社にもあらぬ御名を負せ奉りし他。これらを思ふに、いよいよ清氏の延喜の皇子ならぬことしらる。氏俊は其身社に仕へながら、朝敵尊氏に与して、其後裔は、又、氏の祖をさへ、あらぬ事に物せられしは、いと罪深くいひかなきこと成べし。

氏貞に到りて、さばかりの旧家を跡など減されしも、ひとへに大神の怒りおもほそせしもの。

允恭の御世の深湯のことをおもはざるこそ、氏人大きなる過ちもけれ。

天正の次までは、宮人七拾余人ありしが、今わづか十三人になれり。此うち深田氏二人嶺氏一人は、何れも宗像朝臣にて、昔の大宮司の族也といふ。

御社の側に、弥陀（石像なり）長四尺八寸横厚九寸あり。むかし平内大臣重盛公、宋国の育王山に沙金二千両を送らる。内大臣甍玉ひて後、かの寺僧、大蔵経と襄陽にありし隋の陳仁稜書たる弥陀経を模して、石仏の背に刻て贈れり。

其船、神の湊のかたはし、江口といふ所に着ぬ。既に此時平氏亡びたるあと也しかば、これを受入る人なく、宋人せんかたなくて、大蔵経を此社にこめ、石仏を江口のほとりに建置て帰れりといふ。近比ここに取いたり。其彫れるさまいと工なり。その手も勝れたりとぞ。二町ばかり田島村のかたはらに清水有て、御炊の水といふ。かたはらに碑たてり。長四尺八寸横厚九寸あり。むかし平内大臣重盛公、宋国の育王山に沙金二千両を送らる。内大臣甍玉ひて後、かの寺僧、大蔵経と襄陽にありし隋の陳仁稜書たる弥陀経を模して、石仏の背に刻て贈れり。

天真名井をうつせしよし記せり。

けふもいとあつき（暑）ければ、御社を出で、前なる家に入て破籠など取出して、しばし休みて、江口川の橋を渡り、吉田の鎮国寺にまうづ、御社に五六丁ばかり東北の山に、昔は（大）なる寺成しと見えて、畠の字に子院の処多く残れり。

此寺、亀山天皇の弘長（一二六一～六三）の頃、宗像長氏建立して定額寺とし、皇鑒といふ僧を住しむ。文永（一二六五）二年の比、太政官符宣あり。又、田島村に大宮司の館趾あり。あるひはこの村の内の山岸に、楢葉の紋ある石あり。これを割てみれば、枝葉鮮かにしてその紋悉く隠化、楢の樹の年経てなる成べし。

「神郡宗像 宗像大社 末社めぐり」

(一) 織幡神社
（摂社・旧県社）

宗像郡玄海町大字鐘崎の北端小屋形山に鎮座される「織幡神社」を参拝した。

織幡神社は、祭神に武内大臣・志賀大神・住吉大神・天照大神・宗像大神・宗像大神・香椎大神・八幡大神・壱岐真根子臣を祀る旧県社である。

当社の由緒記によると、鎮座年月は不詳なれど、文徳実録（八五〇）日、嘉祥三年七月辰授筑前国織機従五位下（此年八月散位従五下高原王向豊前筑前宝剣明鏡ヲ諸社ニ奉ラル。此時織機神ニ授位ノ官幣アリト云、基明鏡三面而十今在ス。又一説三云、比明鏡ハ神功皇后三韓征伐ノ時、韓王ヨリ奉献シタルヲ後ニ当社ヘ納メ給ヘリトナリ。）

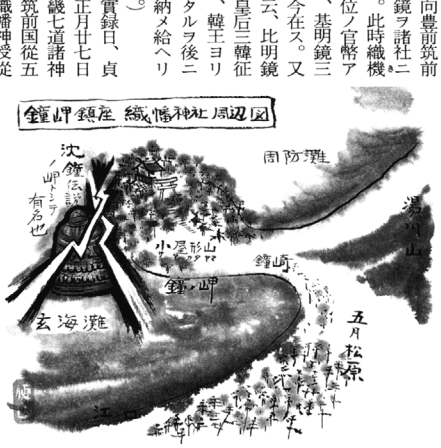
三代実録日、貞観元年正月廿七日甲申京畿七道諸神進階、筑前国従五位下、織幡神授従五位上、二月丁亥朔、遣使五畿七道弊諸神、告以即位之由。同書日、元慶元年十二月十五日辛巳授筑前国従五位上織幡神正五位下。

また当社記日、当社草創云々。履中天皇年中武内大臣此岬二至リ給ヒテ、全身上天アリシ所ヲ、和魂ノ表トシテ、是ヲ沓塚ト名ツケヤリテ、其霊地ニ荒魂ノ表ヲ立テ、織幡神社ト号シテ、壱岐直眞根子臣ノ子孫ノ人ツタヘテ是ヲ祭ル云々。同書日、当社武内大臣ノ神変力ニテ、異敵退散ノメテタキ旗ヲ織給ヘハトテ、代々ノ帝ヲ尊崇アリテ、織幡ノ神社ト号シ云々。毎年十一月中ノ卯ノ日ニハ、新嘗会ノ手向アリテ、他ニ異ナリシ叡慮ナリキ、是併我朝守護ノ霊神ト云。異国征伐ノ神功アルニ報シテナリ云々。と記されている古社である。

筑前国続風土記に、鐘崎の民家を去る事五町ばかり艮の方に在。此山丸くて何方より向ひても背面なし。林木茂れり。或説に此山を小屋形と云。名所他。

海上より見れば、其形屋形に似たり。故に名付と云。三方は海なり。一方は外地につつく。山の形ろるはしく、怜も主の盤上に在が如し。山の傍に神廟有…と記されている。

福岡県一の漁獲高を誇る鐘崎漁民の厚い信仰に守られている当社は、境内も美しく整備され、参道も石段も、鳥居、燈籠を始めとする諸建造物が整頓されている。



宗像神社史に曰、古くは宗像郡内での式内社は、宗像神社と当社の二社であった。

宗像神社について、朝廷の尊崇の篤かったことが知られる。文永九年（一二七二）九月三日の宗像大神官神官僧官御燈衆等起請文には「織幡大明神」と「許斐権現」との二社名が見え、建武元年（一三三四）三月廿日の雑訴快断所牒には「織幡・許斐・孔大寺権現」の三社が見ている。

御縁起には宗像三神に織幡大明神と許斐権現とを加へてこれを宗像五社といひ、常にその筆頭は当社である。と記されている。

現在の神社明細帳によると、大正十四年九月十二日、神饌幣帛料供進神社に指定され、例祭は四月十六日・十月九日・神幸十日。社殿は明治二十四年改築。神殿流造、渡殿、拝殿とあるが、昭和四十八年に老朽化と白アリ害による大改修が行われ、拝殿は鉄筋コンクリート建造物になっている。又、境内神社は十社ある。

須賀神社　白峯神社
御崎神社　海原神社
稲葉神社　恵比須神社
今宮神社　高殿神社
根岸神社　直日神社
以上十社也